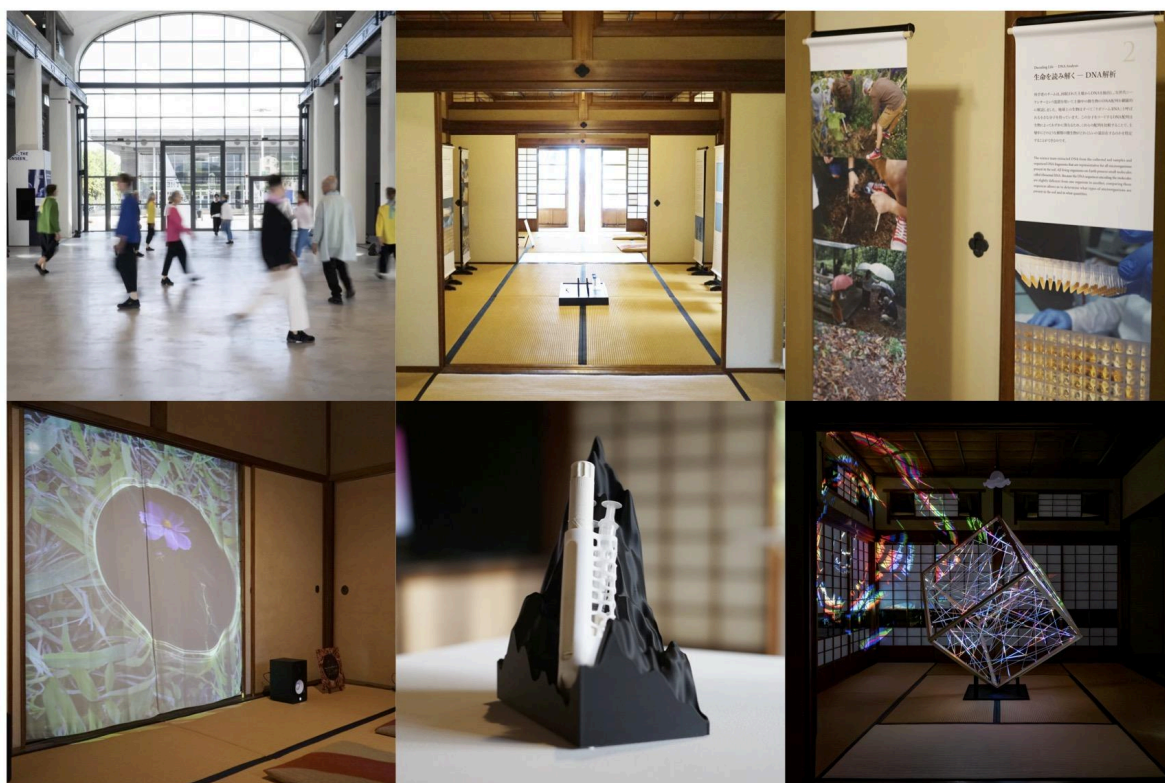


本日開幕！「科学と芸術の丘2026」歴史ある戸定邸での作品展示から、身体でつくるワークショップまで

今年のテーマは「**Weaving the Microcosmos – 小宇宙を編む –**」。科学・芸術・自然が交差する多彩な展示や体験プログラムを展開



2026年10月24日(土)・25日(日)の2日間、千葉県松戸市の〈戸定邸・松雲亭・戸定が丘歴史公園〉をメイン会場に、国際フェスティバル「科学と芸術の丘2026」を開催します。今年のテーマは「Weaving the Microcosmos – 小宇宙を編む –」。科学・芸術・自然という異なる領域を横断しながら、国内外のアーティストや研究者、市民が関わる多彩な作品展示や体験プログラムを展開します。

私たちの身の回りには、普段は意識することの少ない、小さくも豊かな世界が数多く存在しています。土の中に生きる微生物、植物が持つ色彩、積み重なった記憶や歴史、一人ひとりが持つ身体の感覚や経験。今年のフェスティバルでは、そうした一つひとつの世界を「小宇宙」と捉え、異なる世界が出会い、互いに影響し合うことで生まれる新たな発見や関係性を探ります。

メイン会場となる戸定邸では、土壌の微生物をめぐる国際共同研究の成果を可視化・音楽化した作品、植物由来のインクを使い、描きながら色を変えられる独自開発のペンやドローイング、糸と

光によるインスタレーションなどを展示。さらに、身体表現を通して他者や自然と関わるワークショップをはじめ、会場全体を使って科学や芸術を身近に体験できるプログラムを開催します。

開幕前日の10月23日(金)には、メディア向けプレスツアーを実施しました。ここでは、実際の展示風景とともに、アーティストやプロジェクト関係者が語った作品の背景や見どころをご紹介します。

公式サイト: <https://science-art-matsudo.net/>

注目の作品・プログラムを紹介

■ The Garden Experiment — Mens sana in ambiente sano | NCCRマイクロバイオーム×産業技術総合研究所(AIST)バイオものづくり研究センター×在日スイス大使館 科学技術部×科学と芸術の丘(MISAF Lab)



昨年から2年間に渡り展開する「The Garden Experiment」は、日本とスイスの研究機関やチームが連携し、市民とともに土壌に生息する微生物の多様性を探る国際共同プロジェクト。科学と芸術の丘のコアメンバーを中心とする研究開発チーム「MISAF Lab」も参画し、科学的な研究と芸術表現を組み合わせた取り組みを進めています。

昨年は日本とスイスの市民が実験に参加し、それぞれの庭や畑で一定期間培養させた土壌のサンプルを回収・分析。日本国内115か所を含む、両国合わせて300か所以上のデータが収集されました。

今年はその研究成果をもとに、科学的なデータを視覚や聴覚を通じて体験できる展示を展開します。会場では、実験の過程を紹介するほか、土壤に生息する微生物の種類や割合を、日本の伝統色を使った大きなタペストリーとして可視化。日本とスイスの土壤に見られる共通点や違いを、色彩を通して感じ取ることができます。



プロジェクトに携わるMISAF Labのメンバー、関口智子は、今回の取り組みについてこう話します。

「土壤の微生物は、私たちの暮らしと深く関わっていますが、その多様性は世界的に失われつつあります。今回のような市民参加型の実験が、微生物の多様性を守り、回復していくための研究につながり、世界的な課題の解決にも少しずつ貢献できればと思っています」

さらに、別室で展示される「Songs of the Microcosmos」では、土壤のDNA解析データを音へと変換。戸定が丘歴史公園や千葉大学園芸学部など、実際に実験が行われた場所のデータをもとに、目に見えない微生物の世界を音楽と映像で体験できます。

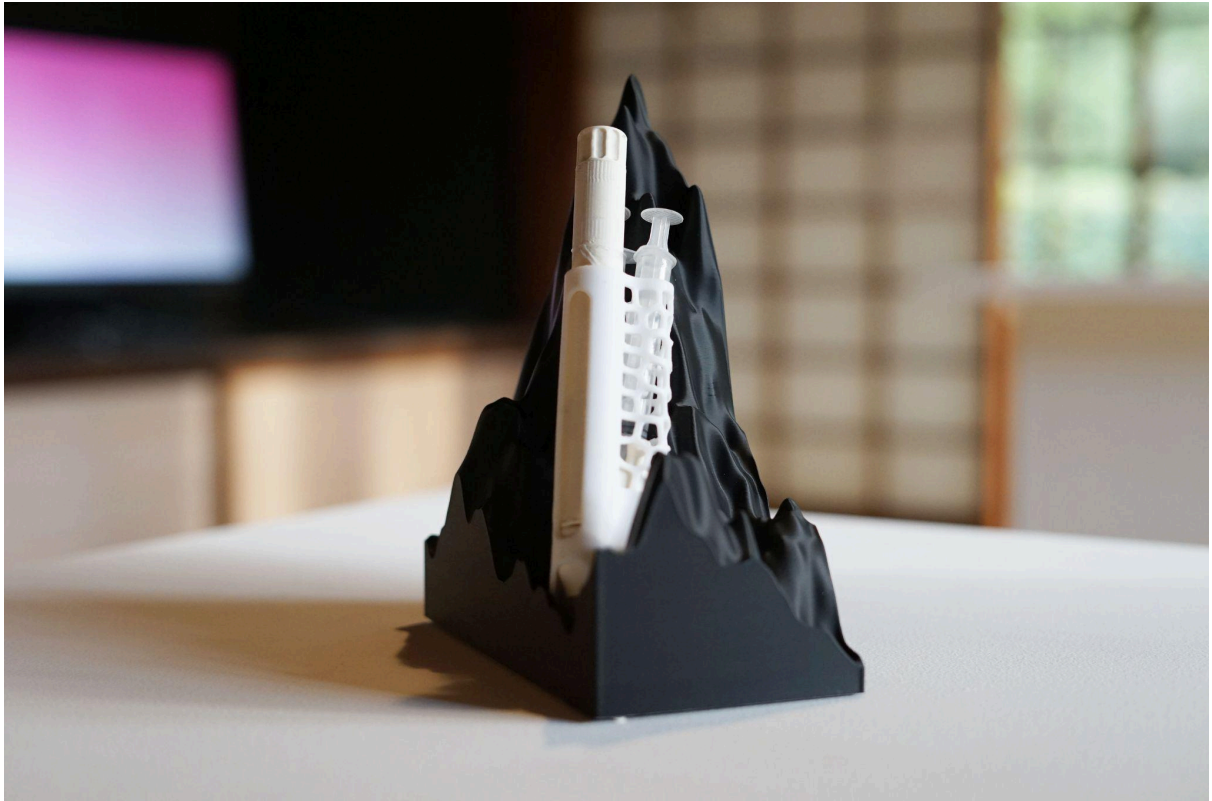


同じくMISAF Labのメンバーであり、バイオアーティストの清水陽子は、科学と芸術の間でアートが果たす役割に触れました。

「科学者たちが集めたデータも、そのまま見せるだけでは、なかなか人の心に届かないことがあります。科学的な知識を直感的に理解したり、行動につなげたりするために、アートやデザインが橋渡しできるのではないかと考えています」

また、会期中には、日本国内で回収された115か所の土壌サンプルを並べる「Soil Gallery」も公開予定です。科学的な分析と市民の暮らしの記録、そして芸術表現を通して、普段は目にする事のない土壌の微生物の世界を見つめ直します。

■ 《pHeil》、《Circle of pHen》ほか | pHen ARTIST COLLECTIVE



ハンガリー・ブダペストを拠点に活動するアーティストコレクティブ、「pHen ARTIST COLLECTIVE」。デザイナーとしての視点も持つ彼らは、植物由来の素材や独自に開発した道具を用いながら、科学とデザイン、芸術を横断する制作活動を行っています。

今回の展示で中心となるのは、植物由来のインクを使い、描画しながら色を変化させることができる、独自開発のペン型描画ツールです。

このペンの特徴は、化学反応を利用して一本でさまざまな色彩を生み出せること。たとえば紫キャベツからつくられたインクは、酸性・アルカリ性の違いによって色が変わります。クエン酸を加えるとピンク色に、重曹を加えると青や緑へ。身近な植物に含まれる色素の性質を、描画の技術として活用しています。

さらに、この描画ツールの設計データはオープンソースとして公開されており、3Dプリンターを使って誰もが制作できるようになっています。道具や技術を独占するのではなく、共有することで、それぞれの地域にある植物を使った新たな表現の可能性を広げています。会場では、アーティストたちによるドローイングに加え、事前ワークショップで参加者が制作した作品も展示されます。



■ layers | 穴井佑樹

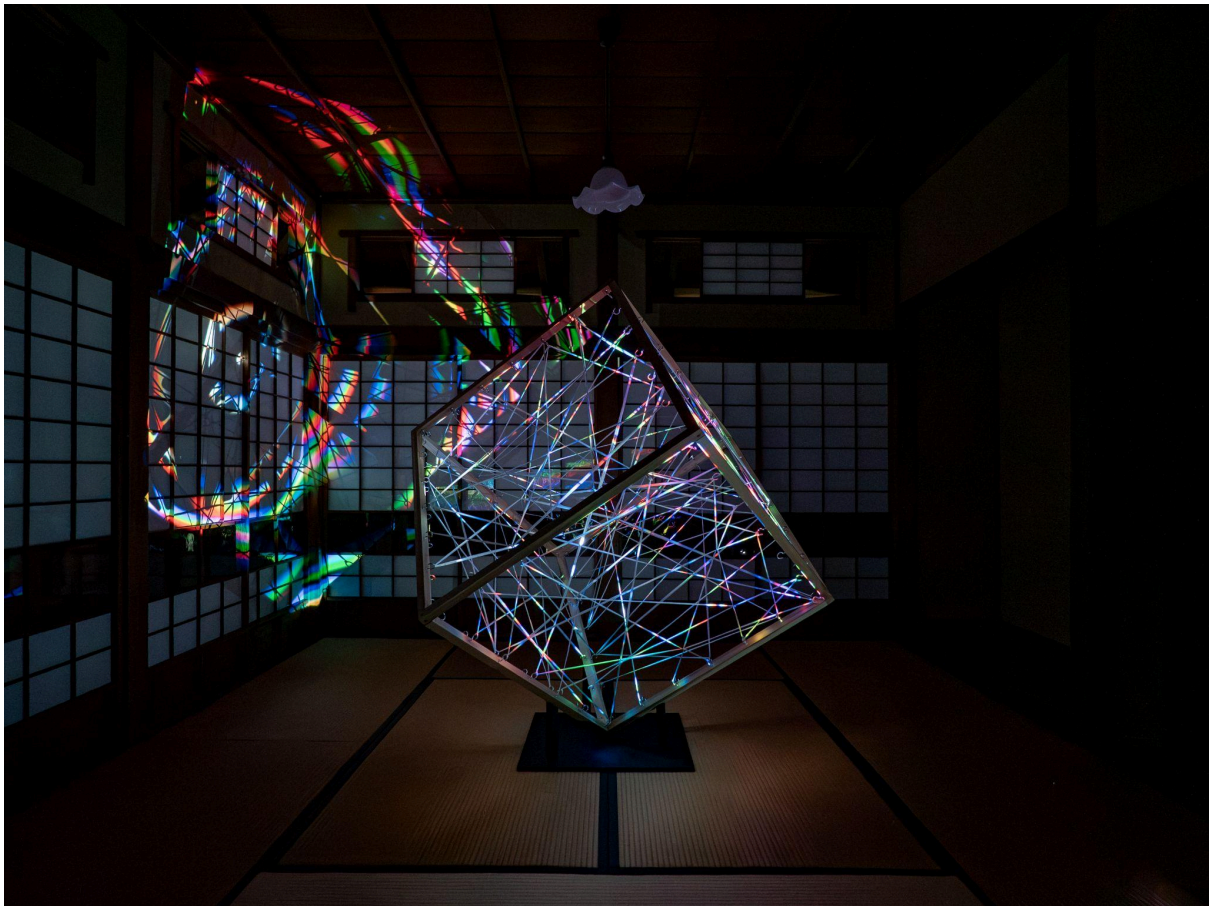


写真: Riku Hirota

戸定邸の離座敷に展示される、アーティスト・穴井佑樹による「layers」は、糸と光、音を組み合わせたインスタレーション作品です。

「layers」は、もともと平面作品として制作されていたものを、今回のテーマに合わせて、空間全体を使った作品へと展開したもの。幾重にも張り巡らされた糸に光が重なり、ゆるやかに変化する光や音によって、空間の印象も移り変わっていきます。穴井は、今回の制作について次のように語ります。

「『小宇宙を編む』というテーマを聞いたとき、編むという行為には、さまざまな物語が重なっているように感じました。もともとは平面作品だった『layers』を、今回は空間全体で体験できる作品にし、光の動きや音も、この場所に合わせて制作しました。作品と向き合いながら、自分がこれまで歩んできた軌跡を感じたり、最後には自分の内側に入っていくような体験ができたりする空間になればと思っています」



▲アーティストの穴井佑樹

■ Moving Landscape: Dancing Neighbours – Movement Workshop |
Michal Šandor



▲ダンサー・文化プロデューサーのMichal Šandor(ミハエル・シャンドール) (右側)

作品を鑑賞するだけでなく、来場者自身が参加できるプログラムも「科学と芸術の丘」の魅力です。

今年、新たな試みとして開催するのが、身体表現を取り入れたワークショップ「Moving Landscape: Dancing Neighbours – Movement Workshop」。ドイツを拠点に活動するダンサー・文化プロデューサーのMichal Šandor(ミハエル・シャンドール)が講師を務めます。ミハエルは、ドイツ・ケムニッツで、多様な世代や背景を持つ人々が身体を通して交流するプロジェクト「ダンシング・ネイバーズ」のアーティスティック・ディレクターとしても活動しています。

今回のワークショップの舞台は、戸定が丘歴史公園の梅園。参加者は、コンテンポラリーダンスやドイツの演劇教育、即興の手法を取り入れながら、言葉だけに頼らず、身体の動きを通じて他者や周囲の自然と関わっていきます。ワークショップの成果は、一般来場者に向けた短いパフォーマンスとして披露される予定です。ミハエルは、プレスツアーで次のように語りました。

「誰もが身体を動かせるという、とてもシンプルな考え方ですが、その奥にはさまざまな意味が重なっています。私たちは人々の違いを受け入れ、ダンスの専門家ではない人々とともに、数時間でパフォーマンスをつくり上げることに挑戦します。そうした違いを通して、一つの小宇宙を生み出すことを楽しみにしています」

■ ディレクターが語る、フェスティバルに込めた思い

プレスツアーの締めくくりに、共同ディレクターの岩澤哲野は、フェスティバルを通じて目指していることについて、次のように話しました。

「私たちが目指しているのは、フェスティバルの2日間だけで何かが完結することではなく、ここで生まれた出会いや対話が、これからの松戸の文化や日常の中にも少しずつつながっていくことです」

また、共同ディレクターの海野林太郎は、作品に共通する環境問題への視点についても触れました。

「今年、松戸や千葉で起きた大雨もそうですが、世界各地で起きている環境問題は、決して他人事ではなく、地続きにある問題だと思います。一見すると遠く感じられる出来事も、実は自分たちの暮らしとつながっている。そうしたことを、作品を通して実感してもらえたらと思っています」



▲左から、「科学と芸術の丘」共同ディレクター 岩澤哲野、海野林太郎

ワークショップ、トーク、マルシェなど、多彩なプログラムを展開

「科学と芸術の丘2026」では、作品展示に加え、子どもから大人まで参加できるワークショップやトークイベントなど、さまざまなプログラムを開催します。

千葉大学の研究者とともに公園内の昆虫を観察し、身近な生態系を発見する「昆虫観察アウトドアワークショップ『科学と芸術の丘探検隊』」、速さではなく遅さを競う「ワイルド遅四駆をつくって自然の中を走らせよう!」、作品を囲んで参加者同士が感じたことを語り合う対話型鑑賞プログラム「おしゃべり鑑賞会『断片からはじまる小宇宙』」など、科学や芸術を多様な方法で楽しめる機会が用意されています。

また、戸定邸の大広間には「ラーニングスペース」を設置。これまでのフェスティバルの記録集や写真、年表、映像などを紹介するほか、来場者が展示の感想を共有できる場としても活用します。

戸定が丘歴史公園では、地域のカフェやショップが集まる「丘のマルシェ」も開催。作品鑑賞の合間に、食や買い物を楽しみながら、思い思いの時間を過ごすことができます。

さらに、松戸市内各所では、地域のさまざまな場所や活動をつなぐ「CATALYST LINK(カタリストリンク)」を展開。フェスティバルをきっかけに、普段は訪れる機会のない場所や、街で活動する人々と出会う機会を生み出します。

科学と芸術、自然、そして地域の日常。さまざまな「小宇宙」が交わる2日間に、ぜひ足をお運びください。

《Information》

■ 開催概要

名称：科学と芸術の丘2026

テーマ：Weaving the Microcosmos – 小宇宙を編む –

会期：2026年10月24日(土)10:00～16:30、10月25日(日)10:00～16:00

会場：千葉県松戸市(戸定邸、松雲亭、戸定が丘歴史公園、松戸市内各所)

メイン会場所在地：〒271-0092 千葉県松戸市松戸714-1

料金：一般 1,500円、高校生・大学生 1,400円、松戸市民割 500円(在住・在勤・在学の方)、中学生以下無料

※戸定が丘歴史公園および丘のマルシェはチケット不要です。

※ワークショップは事前予約が必要です。別途参加費がかかるプログラムがあります。

主催：松戸市、科学と芸術の丘実行委員会

企画運営：科学と芸術の丘実行委員会

パートナー：在日スイス大使館・科学技術部、NCCRマイクロバイオーム、国立研究開発法人 産業技術総合研究所 バイオものづくり研究センター 微生物システム創発研究チーム

協力：千葉大学園芸学部 応用昆虫学野村研究室、遅四グランプリ実行委員会、あーとえきっぷ、戸定祭実行委員会、松戸アートピクニック実行委員会

プロジェクト助成：サカエ・シュトゥンツィ基金、公益財団法人 花王財団、EU・ジャパンフェスト日本委員会

協賛：株式会社生物技研、株式会社ビーテック、株式会社むかしの堆肥、株式会社アトレ、京葉ガス株式会社、マブチモーター株式会社、プラーレ松戸、KITE MITE MATSUDO、株式会社千葉銀行、株式会社千葉興業銀行、東京ベイ信用金庫

ツアーサポート：松戸シティガイド

後援：JOBANアートライン協議会、松戸商工会議所、一般社団法人松戸市観光協会、公益財団法人松戸市文化振興財団、公益財団法人松戸市国際交流協会、松戸市教育委員会

助成：令和8年度 文化庁 文化芸術創造拠点形成事業

公式サイト：<https://science-art-matsudo.net/>

■ 本件に関するお問い合わせ

科学と芸術の丘 広報

e-mail: pr@science-art-matsudo.net

電話：047-712-1593（松戸市文化スポーツ政策課）（平日8:30～17:00）